



## カルチャーオンラインツアー

### 京都 松尾大社

**0 : 0 0** みなさん、こんにちは。てれんぼの井上ゆき子です。

私は今、嵐山にほど近い松尾大社（まつのおたいしゃ）というところにやってきました。

京都では松尾大社（まつおたいしゃ）とよく呼ばれるんですけども、こちらは京都で最も古い神社として有名です。

また、お酒の神社、お酒にまつわる神社としても非常に有名なところですよ。

今日はこちらの中、神社の中、そして庭園なんですが、重森三玲の最後の作品とされる庭園もご案内をさせていただきます。

それでは動画の方、スタートいたします。

**1 : 0 4** みなさん、おはようございます。

今日は松尾大社のご紹介をさせていただきたいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

私、権禰宜（ごんねぎ）の岩田と申しますが、短い時間ですけども、みなさんにとって実りある時間になればというふうに思いますので、宜しくお願いいたします。では、お進みいただきたいと思います。

さあこちらご覧いただければ、こちらに大きな鳥居があるのがわかりいただけるかと思います。

一番上、扁額（へんがく）の部分に松尾大神（まつおおおかみ）と書かれておりますけれども、ここでひとつご紹介させていただくのが、「松の尾っぽの大きいやしろ」と書いて、松尾大社というふうな書き



ますし読みますけれども、正式名称というのは「松尾大社（まつのおたいしゃ）」です。「の」の字が入るんですね。

ただみなさんやはり、我々もそうなんですけれども、漢字の如く「まつおたいしゃ」というふうな言い方をいたしますけれども、正式名称は「まつのおたいしゃ」となりますので、ひとつこちらもご記憶いただければと思います。では、どうぞ。

**2 : 5 3** さあそしてみなさん、こちらご覧いただきますと、鳥居の下に何やらぶら下がっているのがおわかりいただけるかと思えます。ご参拝のみなさんから一番質問をいただくのが、実はあちらにぶら下がっているものなんですね。

「神主さん何ですか？」っていうふうについていつもよくいただくんですけども、お榊（さかき）の束がぶら下げてあります。

1 2 束、今年は閏年（うるうどし）なので1 3 束ぶら下げてあるんですけども、これお正月に買います。

ですので、1 年間吊った状態です。吊ったままですね。

ご覧いただいた通り、葉っぱというものがもう枯れた状態となるんですけども、この脇勧請（わきかんじょう）、松尾大社の方では、“鳥居の原型”ということで伝わっているものでございます。

これは私、勝手に思っているんですけども、昔は鳥居こんな複雑な形をしていなかったんじゃないかなと思っています。

神社にとって鳥居というのは、いわゆる玄関に当たる部分ですし、そしてその中にはしめ縄（注連縄）をしております。

しめ縄というのは、“神様の結界”を表すひとつの形でございます、ここから神様が外に出ないように、またこの内側は神様がお守りに



なっている場所だと、お鎮まりになっている場所だという位置づけが、このしめ縄に表されております。

どこの地域でも、なかなか全部の場所がこのような形で色が塗ってあって、鳥居というのを作るのは難しいと思うんですね。

なので昔は、多分ですけども、丸太にしめ縄があって、その下に榊(さかき)がぶら下がっている。

榊というのは、漢字でも「木へんに神」という漢字を書きますけれども、“神様の宿る木”ということで、神社の祭典では必ず使うのがこのお榊でございます。

その下をくぐってお詣りするというのがひとつの形だったんじゃないかなというふうに言われておりますので、当社ではこの部分は鳥居の原型として伝わっているものですし、また、この枯れ具合によって作物の吉凶を占ったというふうに言われているのが、この脇勧請(わきかんじょう)でございますね。少しご紹介させていただきました。

**5 : 2 6** そしてこちらにご覧いただきますのが、船が三艘(さんそう)でございます。

当社は、4月5月に「神幸祭(しんこうさい)」「還幸祭(かんこうさい)」と言いまして、お神輿(みこし)さん六基が出るお祭りがございます。

京都の中に三ヶ所、御旅所(おたびしょ)というものがあるんですけども、その場所まで神輿が渡りました。そこで3週間、お鎮まりになられます。



そして、3週間後の還幸祭に、神社の本社の方にお帰りをいただくお祭りが「還幸祭」です。

約1000年ほど続いているお祭りになるんですけども、当然の如く町の中に行きますには、桂川を渡って神輿は進まなければなりません。

今のように必ず橋があるわけではございませんでして、その際にこの船にお神輿さんを乗せてお渡りになったということで、現在でもこの三艘の船を使って神幸祭が行われているところとなりますので、ご紹介させていただきます。

**6:57** さあ、こちらが松尾大社の楼門ですね。寛永年間にできたものでございます。

江戸初期にできたのがこの楼門。よく京都の方でも、江戸中期以降の建造物というのは残っているんですけども、江戸初期までというのは、なかなか今残っていないというのが多いようです。

幸い当社の方では、現在でもこのような形で江戸初期の楼門が残っておりますが、もう少しお進みいただきましたら、少しおもしろい部分がありますのでご紹介させていただきます。

ぜひ、みなさん見落としがちのことですのでご紹介をさせていただきますのでございます。

さあこの楼門、今両側にですね、こちら側は黒い衣装、そして左の方には赤い衣装をまとった人形が安置されておりますけれども、これもよく「何の神さんですか？」っていうふうに言われるんですけども、これは「随神（ずいじん）」と言います。



これ、神様じゃないんですね。

いわゆる門番がここに配置されている形になるんですが、ここでひとつご紹介。

あちらの黒い随神さんには、豹（ひょう）のような柄の椅子にお座りです。

こちらは、虎のような描かれた椅子にお座りです。

門番です。門番というのは、やはり強い人たちという意味合いでお座りです。

それと同時に、やはり強い人たちが何かを退治した、退治するようなそれぐらいお強い人たちが今ここに安置されているんですけども、この随神さんというのも、やはり中国から伝わってきた影響でこのような形になっておりますけども、日本に虎も豹もいません。

中国から伝わってきた絵を見て、絵を元に絵師さんがこのような形でお作りになっておられましたね。

当時の話なんですけれども、虎のことを見たことがないので、虎がオス、そして点々模様がメス、そういうふうにして描いてはったそうです。

たしかに日本には虎も豹もいませんので、なんとなく強い動物というぐらいだったんでしょうね。

これもひとつ、私、絵師さんの方から伺った話ですので、少し余談としてお話しさせていただきます。

**10:18** さあ、今境内に入ってまいりましたが、今この川の両サイド、一面に緑色の葉っぱがあるのがおわかりいただけるかと思います。



残念ながらちょっと時期が違いますので、花は咲いておらんのですけれども、今見えております部分、すべて山吹の花です。

境内に3000株ほどの山吹がございまして、山吹は4月5月がちょうど咲く時期、見頃を迎えるという形になるんですけれども、関西一の山吹の名所としてご紹介をいただいております。

山吹は黄色い小さい花なんですけれども、それが3000株ほど、境内一面に咲き誇りますので、そういった時期にまたお越しいただければ、普段と違う風景の神社をご覧いただくこともできるかと思っておりますので、ここでご紹介をさせていただきました。

**11:33** こちらが手水。今、新型コロナウイルスの感染防止対策としまして、松尾大社も普段ですとひしゃくでの手水を行っていただいておりますけれども、今は竹の口から注ぐ流水をもって、みなさん各自でお清めをいただいております。

松尾大社は、手水が亀の像からなっておりますけれども、亀と鯉が松尾大社にとっての神様のお使いです。

松尾の大神様、この地にお越しになられる前、桂川を上ってここまでお越しになったと言われております。

そういった中、川の流れが緩やかなところは亀の背中に乗って、また流れが急なところは鯉の背中に乗ってこの地までお越しになったと言われております。

そういったところから、当社では亀と鯉というのが神様の使いとして信仰しております。

境内各所で亀と鯉が置かれているのは、そういった関係でとなりま



すので、今度お越しいただいた時、お探しいただけるのもひとつ宜しいかなというふうに思います。

**13:13** はい、それでは次、いよいよなんですけども、こちらが松尾大社のご本殿ですね。

一番奥に屋根の部分だけ見えているのが、松尾大社のご本殿、いわゆる大神様がお鎮まりになっておられる場所が一番奥でございます。少しせり出しておりますのが釣殿、そして拝殿、そして楼門と。松尾大社の境内の建造物に関しましては、ひとつの一直線で配置してありますのが、松尾大社の境内でございます。

御祭神は「大山咋神（おおやまぐいのかみ）」、そして「市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）」。

男女二柱の大神様をお祀りした神社になるんですが、この大山咋神様というのが、“お酒の神様”としての信仰も集めている神社となります。

こちらご覧ください。本当にたくさんの酒樽があるのがおわかりいただけるかと思います。

よくよくテレビのコマーシャルで見るような銘柄もあれば、聞いたことのない酒屋さん、いわゆる地酒として営んでおられる酒屋さんのものまで、本当にたくさんの全国津々浦々からいただいておりますのが、この酒樽でございます。

こういったところをご覧くださいましても、松尾大社の方が全国のお酒屋さんから広く崇敬を集めている神社というのがおわかりいただけるかと思います。



ただここで一点だけ、どうしてもお酒のイメージが強いので、お酒の神様というふうになるんですけれども、松尾大社、実は「醸造」とも言われておりました、味噌も醤油も酢も、そういったものの大神様となりますので、その他のメーカーさんですね、会社さんからも広くご崇敬をいただいております。

**15:22** もうひと柱の市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）、これは女の神様ですけれども、九州の宗像大社さんの御祭神と同じとなります。

いわゆる海上交通の大神様なんですけれども、なぜ海上交通の神様がこの地にお鎮まりになっておられるか。というのが、海ございませぬ。なぜこの地にお祀りされているかというふうに申しますと、松尾大社というのは秦（はた）氏の影響の非常に強い神社となります。秦氏が親神として崇めた、ご崇敬いただいたのが松尾大社となりますので、そういったところから秦氏は渡来人、渡来民族ですので、瀬戸内海を船に乗って、渡ってこの京都までお越しになられたわけです。

その時、宗像大社さんから海上の帰依（きえ）をして、そしてご分霊をお預かりになり、この地までお越しになり、松尾大社にお祀りしたというふうにも言われておるのが形でございます、男女二柱の大神様をお祀りしたのがこの松尾大社となりますので、ご紹介をさせていただきます。では、もう少しまっすぐ行きましょうか。

**16:57** 一番奥に見えるのが、当社のご本殿です。

松尾大社のご本殿は、大宝元年701年に創建されたというふうに申しますが、現在のご本殿は応永4年1397年、そして天文11年



1542年に大改修を行って現在に至るご本殿となります。室町時代の建物ということですね。

京都というのは、応仁の乱があったり、また、幕末には蛤御門の変がございましたし、いわゆる建物の消失をする大火災というのが度々起こっております。幸い松尾大社は、その際都ではないんですね。平安京の外にある神社となりますので、幸いにしてそういった戦禍を逃れることができた形です。

ですので、現在もこのような形で室町時代の建物が残っているというのは幸いなこととなりますし、今後も当然この貴重な文化財というのは、守り伝えていかなければいけないものかと思っております。

2年前ですけれども、「平成の御遷宮（ごせんぐう）」と題しまして、本殿の大改修を終えたのが現在の建物です。

その際、文化庁さんの方もいろいろとお調べになられまして、ご本殿の調査をより詳しくなされたんですけれども、当社で残っております通り、“天文11年の大改修をもって現在に至る”部分に関しまして、再度詳細なご調査をいただいて、これが確定と申しませうか、そういったところもございましたので、ご紹介をさせていただきます。

**18:54** 次にご紹介をさせていただくのが、松尾大社にはお庭が三つございまして、合わせて「松風苑（しょうふうえん）」というふうに申します。

今ご覧いただきましたのが、まずひとつ目のお庭「曲水の庭（きょくすいのにわ）」となりますけれども、当社は昭和50年に重森三玲（しげもりみれい）さんという方にお庭を作成いただきまして、現在に至



っております。

昭和50年ですので、まだまだ新しい部類に入るお庭かと思えますけれども、昭和のモダンを追求したモダンの庭を作ると、研鑽を高められました重森さんにお作りをいただいたのが、当社の三つのお庭となりますので、届きましてご紹介をさせていただきます。

**19:49** まずこの「曲水の庭」は、平安時代風のお庭というふう  
に言われております。

貴族の遊び「曲水の宴」をちなんだ形で、手前には七曲りする流れを作りまして、水の流れをもって曲水を作っております。

ただ残念ながら、当社に関しましては、溝が浅いので実際盃を浮かべて遊ぶという曲水の宴はできないんですけども、この小さい石一つひとつが、流れてくるそのお盃を表すというふうにも申します。

そして背面には、皐月（さつき）がポコポコと二つなっておるんですけども、ちょうど上、二島と同じような形になっております。

重森先生、このお庭に関しましては、お日さんの光、上からの光を大事にしたいということで、あえて後ろに大きい木等々を一切植えておりません。

お日さんの光を大事にする形で、この庭をお作りになっておられます。

**20:59** そして重森先生といたしますと、代表的な技法が、今見えておりますこの青石、「緑泥片岩（りょくでいへんがん）」という青石を立ててお庭にするというのが、先生の代表的な技法となるんですけども、これはすべて四国の吉野川から持ってきた石になりまして、重森先生がこの青石を立てて、お庭にする形をお取りになって



おる部分です。

ここでね、せっかくなのでお庭をご覧になられる方に対して、ひとつ私がある先生から聞いたお話をさせていただくんですけども。

「重森先生は天才だ」と仰るんですね。

興味深く私も話を聞いておりましたらね、やっぱりお庭を作る先生にとっては、土であったり木であったり水であったり、得意分野はありになる。

そういった中で一番お庭を作る時に苦労するのがこの「石」だそうです。

というのも、石は全部が全部同じ方向はしていないんですね。

ですので、向きを変えれば怒った顔にも、笑った顔にもなる、向きを変えれば泣いている顔にもなる。

ですので、石というのは方向によって様々な表現が出るので、すごく石の置き方というのは苦労する、そういったものに当たるそうなんですけども。

なぜ「重森先生が天才か」というふうに仰るには、普通お庭というのは、みなさん癒しを求めたりとか、そういった形で拝観に来られます。そういった中で、この水の流れというのはすごく重要だそうで、“進行方向に対して逆の流れを作るから、人というのは水の流れを感じる”そうです。

でも、松尾大社は同じ方向なんですよね。

進行方向はこちらですので、同じ流れで行きますので、それですと、水の流れというのをあまり感じないんですね。



でも、重森先生はなぜ同じ方向にしているか、先生は石を立ててお庭にするのが一番の得意な技法となるんですが、我々拝観者にとっての進行方向からする石の顔というのは、すべて“怒った怖い顔をしている”そうです。

それというのは、なかなか僕らではわからない。

水の流れが逆向きで、しかも石一つひとつが怒ったような顔をしていると、これは自然と疲れてしまうそうです。

重森先生はそこも重々おわかりになって、理解されて石を配置されているそうです。

**23:58** 松尾大社は、東を「加茂の厳神（げんしん）」、西を「松尾の猛霊（もうれい）」と言われます。「加茂の厳神」はちょっと厳しい神様ですね。

そして「松尾の猛霊」、松尾の神さんというのは、猛々しい（たけだけしい）神様という位置づけがございますので、そういった中でやはり御祭神の御神徳を元に、その猛々しい顔を表現するために、わざとこのような形の配置をされているということがございます。

そしてもうひとつ、お庭をご覧になる時には、ぜひこれはみなさん行っていただければと思うんですが、庭師というのは、ここから見えてくれという“正面”を必ずお庭には作るんです。

でもそれは、答えはわからないです。

なので、みなさんどこのお庭に行かれる際にも、どこからが正面で見てくれというふうに作庭者は仰っているのかなというのも考えながら、お庭をご覧になるというのもひとつの方法かと思っておりますので。



私はね、この石だけ少しポンと離れているんですよ。  
なので僕は、ここから見てくれという意味かなというふうに思っています。  
ただ、答えはわかりません。ひとつ、これもご紹介をさせていただきます。

**25:30** 残念ながら今日ちょっと時間の関係がございまして、あちら奥にある建物をご紹介だけさせていただきますが、瓦屋根の建物が見えますのが「神像館（しんぞうかん）」となります。

この神像館の中には、御神像が21体安置してあるんですけども、この三つの御神像というのが平安初期のもので、日本で最古級のものが3体安置してございます。これも日本三大神像のひとつというふうに飾られるものですので、またご機会ある際にはお立ち寄りいただければと思いますので、ご紹介させていただきます。

**26:29** この青石は、重森先生がお作りになる当初というのは、庭師さんからあまり評価の良くない石だったそうなんです。と言いますのが、ご覧いただいている通り、自然の石なのに青いんですよ。  
お庭作らはる人にとっては、人工的なものになってしまう。  
なので、みなさん最初はすごく嫌われたそうなんですけども、重森先生はこの青石を愛されまして、お庭にはこの青石が使われたわけですね。  
実はもう、採ることが禁止となってしまった石でございます。



**27:26** では、次にお越しいただきましたのが、こちら「上古の庭（じょうこのにわ）」です。

また先ほどの曲水の庭とは雰囲気ガラッと変わったお庭をご覧いただいているかと思います。

重森先生の最高傑作のひとつと言われるのが、この上古の庭に当たるんですけども、実は重森先生、このお庭をお作りになってお亡くなりになっておられます。

一番最後に「蓬萊の庭（ほうらいのにわ）」というものをご紹介させていただくんですが、この蓬萊の庭は設計図までお作りになってお亡くなりになっておられますので、重森先生の最終作品はこちらの上古の庭となります。

このお庭は、この裏が松尾山ですが、松尾山の中腹に「磐座（いわくら）」と言いまして、大きい岩がございます。

そこにまず神様が降りられたというふうに言われておりますけれども、それにちなんだ形でこの上古の庭は作庭されております。

一番奥に大きい岩が二つあるのがおわかりいただけるでしょうか。

あの二つの岩が、当社の御祭神、「大山咋神（おおやまぐいのかみ）」と「市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）」を表します。

そして少し右に、斜めになった岩がございます。

この斜めになった岩の先が、降りられた磐座（いわくら）を指していると言われております。

そして、こちらの方からご覧いただきますとおわかりになるんですけども、大きい御祭神を表すお岩二つに対しまして、ひとつ目大きい



石がトントントントンと配置されています。

そして一段下がりまして、もう一度大きい岩がトントントンと並べ  
てあり、そして一番手前にトントントントンと石が立てて置かれて  
おりますけれども、今ご覧いただいている方向から言いますと、渦を  
巻いて天から神様が降りてくる様子をこの石を使って表している  
と言われております。

一面に笹が敷いてありますのは、ここは人の入ってはいけない神域、  
禁足地を表すと言われておるのが、この上古の庭となりますので、ご  
紹介をさせていただきます。

**30:02** それでは最後に、「蓬萊の庭（ほうらいのにわ）」の方  
にお進みいただきたいと思っておりますので、どうぞお願いいたします。

さてみなさん、よく古い神社である技法のご紹介をさせていただきます  
ます。

あまり普段お詣りする時には感じない部分かと思いますが、ご本殿  
をお詣りされた後、みなさんはお帰りになるわけですね。

ここでお気づきになりますか？

ご本殿に対して、楼門があって鳥居ですけれども、当社は右の方に曲  
がっていますよね。

何となく、まっすぐ帰りたいですよね。でも、これ曲がっているんで  
すね。

当社境内の配置図というのは、ほぼ昔と変わらないわけですね。

実際、この石畳からしてもすでに曲がっております。まっすぐじゃな  
いんですね。



これは大きな理由があります。

やはりお詣りする時というのは、神様の方にお詣りされますし、一面に砂利が敷いてあるのも、急いでお詣りすれば、ジャッジャッジャッジャ音がしてしまうんですね。

「心を鎮めてお詣りしましょう」ということで、玉砂利というのが神社、そしてお寺さんにはありますと同時に、お帰りになるときに神様にお尻を向けて帰れないよということ、わざと斜めにしているんですね。

これは古いお宮さんには、お寺さんでもそうだと思いますが、よくよく取られた形でございますので、どこの神社でも参拝される際には、一度そのあたりも気にしてお詣りされるというのも、ひとつ神社を巡る中での楽しみ方かなというふうに思います。

それでは、蓬萊の庭の方にお進みいただきます。

**3 2 : 4 5** さあ、ここがその「蓬萊の庭（ほうらいのにわ）」の入り口となります。

こちら側では、蓬萊の庭となりますので、少しお話をさせていただきますと、この蓬萊の庭は、曲水の庭、上古の庭と比べましても、一番大きい広さを面したのがこの蓬萊の庭となりますが、このお庭に關しましては、いわゆる回遊式、一周回っていただいて、いろいろな方向からお庭を楽しみましょうと、そのような形でこのお庭はお作りになっておられます。

鎌倉時代風のお庭というふうに言われますけれども、鎌倉時代に起きました「蓬萊思想（ほうらいしそう）」から取られたお庭というふ



うになりますし、先ほどご紹介させていただきました、当社は亀と鯉が神様のお使いというお話をいたしましたけれども、実際この中には亀も鯉もおりますので、この庭が蓬萊の庭として、今度は設計図までを重森三玲さんがお作りになったんですが、実際お庭として完成されたのは、息子さんの「重森完途（しげもりかんと）」さんという方がこのお庭をお作りになっておられます。

現在は「重森千青（しげもりちさお）」さんというお孫さんが、いろいろと作業していただいております。

親子三代に渡って携わっていただいているというのが、この蓬萊の庭となります。

ご参拝いただいた際には、また一周していただいて、いろいろな角度からお庭をお眺めいただければ宜しいかなというふうに思います。

### **34 : 39** 重森先生を書いておられる文章がございました。

当時の宮司に、「松尾大社でお庭を作ってくれ」という依頼があったと。しかもいっぺんに3つも作れと。非常に悩まれたそうです。そして、いわゆる普通のお家のお庭を作るのではなく、神様のおられるご神域でお庭を作らなければいけないということで、非常にお悩みになられた。

今日ご紹介させていただいたお庭を結果としてお作りになったんですけれども、最初の曲水の庭に関しましては、お日さんの光を、そして次の上古の庭に関しましては、ふんだんの木々、緑を中心とした木々ですね。

そしてこのお庭は、一面に配したお水を中心としてお庭を作っておられます。

「光・木・水」と、代表的なものを分けてお作りになっておられます。

日本人は古来、光にも木にも水にも、やはり神様を感じるわけですね。そして、先生の代表的な技法「岩」にも、神様を日本人というのは古来思っておるわけです。

その三つのお庭を、様々な表現方法を駆使して、そしてご自分の一番の「岩」を中心として、この三つのお庭をお作りになったのが、この重森三玲先生でございます。

ぜひ当社へお越しいただいた際には、この三つのお庭をご覧いただいて、いかに日本の美術の深さというか、そういったものを感じ取っていただければ幸いかなと思いますので、ご紹介をさせていただきます。ありがとうございました。